

ケララ紀行

ジャパンコミュニケーション会長 山本武明

3月8日夜8時、南インド鉄道バンガロールシティ駅は濃い闇の中に沈んでいた。インド国鉄の駅には改札がない。構内に入り、階段を上り3番線へ向かう。自分たちの名前が印刷されて貼り出されている車両を見つけ乗り込む。旅の始まりは、12時間少々の夜汽車である。気温は30℃を超えているが、風が吹いていて涼しく感じられる。発車まで40分ほど時間があるので、ホームに降り行きかう人たちを眺めていた。東洋人らしい若者が二人、大きいリュックを背負い目の前を通り過ぎて行く。「日本人かな？」と、サチンに聞くと「チャイニーズ」と返ってきた。サチンは、シンプレックスソリューション（インドのIT会社）の役員で日本にも仕事で数回やってきていた。サチンが日本にいるときは、大塚の Snackbar や根岸の居酒屋でよく飲んだものだった。身長は192cm、体重126kg、見た目真っ黒でギョロ目、恐ろしい風貌だがとても優しい心を持った青年である。この旅の同行者だ。

それにしてもインドの夜は闇が深い。街灯はあるのだが暗橙色のせい、埃っぽいオレンジ色の電灯の光は1～2m先で闇に吸いこまれてしまう。人は多い！うじゃうじゃいる。小さな子供たちを連れた家族の一団、自分の体より大きい荷を背負ったり、頭の上に載せて行き来しているポーターらしい人達やオレンジ色の衣を纏った旅の僧たちが、ひっきりなしに目の前を通り過ぎる。ホームの街灯の下にも大勢の人達が集まっていて黒い塊のように見える。失礼だとは思いますが、暗さで目鼻が判別できないため、ジーと見つめてしまう。ストレスが募ってくる。

ゆっくりと列車が動き始めた。サチンはまだホームにいて水道の水を飲んでいる。しばらくしてサチンが笑いながら手すりを掴んで乗り込んできた。昔、こんな遊びをやったような気がした。1時間ほどデッキに立って外を眺めていたが、見えるものがあまりないので車内に戻りベッドにもぐりこんだ。

翌朝は、5時に目が覚めた。窓のカーテンを引いてみたが、外はまだ闇の中。6時近くになり、ようやく明るくなってきて車窓からの景色が楽しめるようになってきた。やがて、線路沿いに点在しているヴィレッジと呼ばれる集落が見えてきて、村人たちの立ち働く様子が興味をそそる。頭の上に大きい籠を乗せて歩いている女性、小脇に水壺を抱えている少女、転がったり、走り回って遊んでいる子供たち、小道を修理しているのだろうか、薄汚れた腰巻一つで煉瓦のようなものを地面に敷いている男達。みんな裸足だ。女たちが頭に載せている籠はほとんど揺れず、ゆっくりと歩く姿勢は、凜としていて品格すら感じさせる。線路が通用路になっていて、遥か先にコメ粒程度にしか見えない籠がいくつも浮かんでい0る。女たちは、かなり遠くまで行き来するようだ。

駅で停車するたびにホームに降り立った。どの駅も同じような風景なのだが、何となく外に出たくなってしまふ。私たちの乗った列車は、スーパーエクスプレス・トレイン。前3両が寝台付きのスペシャル車両でかなり居心地は良い。小一時間ごとに“カペカペチャイ！カペカペチャイ！”と大きな声で子供が回ってくる。体の半分ぐらいの大きさのずん

胴を二つと小さい紙コップの束を腰にぶら下げている。カペというのは、コーヒーのことで、チャイというのは紅茶のことらしい。カペもチャイも飲んでみたが、あまりの甘さに閉口した。しかし、しばらくすると腹が膨れる感じがしてくる。この膨満感はしばらくすると消えるのだが、この甘い飲み物もインド食文化の一つなのかもしれない。この3両の後ろに19両の客車と30両の貨物車が续いている。客車は、とても人が乗るものとは思えない。鉄パイプの椅子に鉄格子の窓。出入り口に扉はなく車内からはみ出た大勢の人々がデッキや窓や屋根の上に荷物と一緒にしがみついている。それが、19両も续くのだ！ごっつい国である。

朝10時にエルナクラムタウン駅に着いた。熱い！暑いではない、熱い！。サチンに確認すると、42℃ぐらいとシラーと答える。アンバサダというインド国産のタクシーに乗り、ボートハウスへ向かった。一般道路を100キロ以上のスピードで飛ばしていく。こうした道もインドにはあるんだと運ちゃんが自慢しているような気がした。エアコンなしの車だから窓は全開かと思ったら、開けると余計に暑いから閉めているとのこと。自慢するなら、エアコン付きの車を走らせろよ。と、心の中で毒づいていた。走行中、クラクションは鳴らし放っした。高音の濁声みたいな耳触りの悪いセンスのかけらも感じられない音で車から降りた時は、思わず「着いたー！」と叫んでしまった。「ちょっと、ここで休憩ね、ボートハウスの船着き場までは、もう少し走ります」と、サチンが言ったときは、天を仰いでしまった。耳鳴りと暑さでくらくらしながらサチンの後についてドライブインと思しき所へ入った。左右に屋台が2～3台、建物の中には6畳ほどのキッチンと50坪ぐらいの食堂が広がっていて、大勢の客でごった返していた。外の屋台もそうだったが食堂の中もあっちこちで蠅が飛び回っている。食堂の天井からは、あの懐かしい蠅取り紙が、所狭しとぶら下がっていた。私が焼き立てのチャパティだけを注文すると、「山本さん、だいじょうぶよ、インドのカリーはなんでも殺菌するよ」と言いながら、忙しく立ち働いているおばさんに向かって、ヒンディ語で注文をした。

「これナンだ？」出てきたカリーを見ながらサチンに尋ねると、

「ナンじゃありません。フィッシュカリーです。南インドは魚が新鮮です。この店はフィッシュカリーで有名です。食べてください」

「サチン？・・・私も親父だからギャグは気にしないよ。でもな、いくらなんでもこの環境で魚はないだろう」

「ダイジョウブ！ホントにおいしいから」と言いながら、サチンは自分の皿を空にした。どうやらもう一皿注文するようだ。“食ってみるか”と、心の中で思いながら手を出しかねていると、

「冷めたら危ないよ！」

「サチン、お前な、旨くないよと言うならわかるが、危ないってのはどういうことだ！」

「ジョーク、ジョーク。気にしないで食べてよ」。

まあ、郷に入れば郷に従って云うしな、と呟きながら、私は口をつけてみた。たちま

ち目を細め「ほほう！」と、表情を緩めた。結構いい味のカーリーだった。しかし、中に浮かぶ魚肉には手が出なかった。

約30分で灼熱と騒音という二つの地獄から解放され、船着場に到着した。私たちが乗り込んだボートハウスにはベッド付きの部屋が二つあり、各部屋にトイレとシャワーもついていた。リビングを兼ねたダイニングが舳先の方にあり休息と食事が楽しめるようになっている。小型のエンジンが左舷後方について萎びた感じの爺さんが、それを操作している。舳先のすぐ手前に生簀のような穴が切られていてハンドル式の舵が備え付けられている。艫のじいさんより年寄りに見えるじいさんがこの舵を操っている。後で聞いたところエンジンを管理している老人は64歳、舵の方は67歳ということであった。もう一人、料理を作ってくれる28歳のジョージという青年がいて、この3人が船のクルーである。

船が動き始めた。迷路のような水路を兩岸の景色や点在する村々を眺めながら走っていく。水は、きれいとは言い難い。泳ぐ気にはちょっとなれない。まもなく、水遊びをしている子供たちや洗濯をしているおかみさんたちが目に入ってきた。水に潜り、蜆のような貝を採っている若者たちがいる。衣類を岸の岩に何度もたたきつけては揉みしだいて洗濯をしている女性たち、身体を洗ったり、歯を磨いている人たちもいる。この水路に拠って暮らしている村人たちなのだろう。途中、とある村に立ち寄った。穀物の集積場になっている村で、このあたり一帯の穀物がこの村に集められ仕分けされた後、いろいろな所へ送り出されるとのこと。吉野川の水運を利用して、藍の集積場として栄えた脇町のような村なのだろう。この村で、100人乗りというカヌーを目にしたときは、その長さと迫力に驚かされた。過去3度も大会で優勝しているとのこと、村の誇りとなっている。30分ほどで再び船上の人となり、目的地へ向かった。しばらく行くと兩岸に広がる田畑で立ち働いている大勢の人達が目に入ってきた。どうやら、稲穂を脱穀しているようだ。20cmほどに伸びた苗の水田も広がっているので不思議な景である。やがて、ボートは大きい湖に入ってしまった。40分ほど進み、中央付近でアンカーを下した。遙か遠く、陽炎のように揺れているヤシの木々の他、目に映るのは水面のみ。サチンがパンツ一丁で飛び込んだ。しばらく泳いでから手招きをし、私に来いと叫んでいる。この湖の深さは平均1.5mぐらいで一番深いところで4mとのこと。サチンのことは気にせず釣りを楽しむことにして、ジョージに道具を借りて釣りを始めた。釣果は30匹、15cmぐらいの大きさのタナゴとキスの合いの子のような魚で、これはなかなか楽しかった。この魚は、夜の食事に唐揚げとなって出てきた。サチンは喜んで食べていたが、私は手をつけなかった。

夕方になって、陽炎のように見えていたヤシの木々がくっきりと見えてきた。湖面に浮かぶ幾艘ものボートハウスが豆粒のように見えている。やがて、日が傾き、夕日がヤシの木にかかりながら水面を赤く染め、南洋の神秘としか形容しようがない景色が眼前に広がっていく。夜、満天の星空を眺めながらウイスキーを楽しんだ。日本から持参した“響”である。サチンにも勧めたが、サチンは心に期すものがあるらしくいくら勧めても飲もう

としなかった。サチンが飲まないのは今日で3日になる。

「サザンクロスはどこに見える？ サチン」

「サザンクロスね、この方向だけどポリューションで見えないですね」

サチンが指す方に目を向けたが、下方がもやっているようで何も見えなかった。夜11時を過ぎても蒸し暑くて眠れそうになかったが、ベッドに寝そべっているうちにいつの間にか眠ってしまった。

翌朝、5時に目を覚ました。舳先に立って、日が昇ってくるのを待っていると目を覚ましたサチンが、腕組みをし舳先に立っている私を見てびっくりしたのか。

「山本さん、寝なかったのですか？そんなところで何をしていますのですか？」と、言いながら起きてきた。

現地時間6時20分、ようやく日が昇ってきた。湖面からゆっくりと上がってくる。ヤシの木がシルエットのように浮かび上がっている。外には何も見えない。まさに、エキゾチックな南インド、ケララの景観である。

10時に昨日出発した船着場に帰港した。クルーの人達に感謝の気持ちを伝え、一緒に記念写真を撮り別れた。舟着場には昨日のタクシーが待っていて、二日目の宿泊地となるマラリクラムへ向かった。40分ほど走ったところでヒンズー教の祭りに出くわした。見物させてもらうことにして車から降り、祭りの中へ入って行こうとすると運ちゃんが私の足元を指差して何か言っている。

「サチン、なんだって？」

「靴を脱げって、あっ、靴下も脱いで裸足になれって」

祭りがおこなわれている寺までは、まだ150メートル以上ある。

「何でここで脱ぐの、サチン？」

「靴がなくなるからだって！タクシーの中に置いて行けって」

ところどころに水たまりがある道を歩いて行く。小石や砂利が散らばる道を注意しながら行くと、寺の広場に出た。広場は、隙間もないぐらい沢山の村人たちでごった返していた。寝転んでいる人たちもいる。お寺に向かって、右側に5頭の象が一行に並んでいる。頭から鼻にかけて金色の飾りを着け、背中に10人ほど乗れそうな籠を乗っている。その象の足の間で日差しを避けている人達がいるのにはびっくりした。祭りが始まるのは夜からということなので車に戻り目的地のマラリビーチに向かった。マラリビーチはマラリクラムにある高級リゾート地らしい。約10分で着いた。

アラビア海に面した広大なビーチを有するリゾート地である。ヤシの林の中に大小の建物が見え隠れしている。コテージと呼ばれていて、屋根はヤシの葉で葺かれている。我々のコテージ番号が43であるから、80棟ほど建っているのだろう。入口には色鮮やかな花々に飾られたアーチ状の門があり、そこに“WELCOME To MARARIBeach”と、踊るような字で書かれていた。アーチをくぐると直ぐに大きいプールが見えてきた。瓢箪の形をしている。車を降り、プールに近づいてみた。深海を思わず澄んだ青い水、3mぐらい

はあるのだろう、かなり深い。プールの左側にはヤシ葺き屋根のログハウスが気持ち良さそうに建っている。レストランらしいが、オープンスペースが多く開放的である。その後方にヤシの林が広がり、アラビア海へと続いている。ヤシの林の中には、ハンモックに揺られている人達もいて、休暇を楽しんでいる。

「山本さん！こっち、こっち」と、受付を済ませたサチンの声に、「分かった、いま行く！」と返事を返して、サチンが指さす 43 号棟へ足を向けた。43 号棟は、敷地が 50 坪ほどで芝生が敷きつめられ、まわりは数本のヤシと生け垣に囲まれていた。木製の玄関をはいると、左手に 6 畳間の寝室が二部屋、その奥に 10 畳ほどのリビング、右手には、マッサージルームとシャワールーム。外には、リビングとシャワールームに囲まれるように広いオープンルームがある。二人で泊まるには、もったいないなという気持ちに見舞われながら、荷をほどき海水パンツに履き替えた。外に出て、若者たち（スタイルのいい女性達を含む）が楽しんでいる瓢箪プールを左に見ながら、ハンモックに揺られている沢山のナイスボディにも目を移すことなくビーチへでた。 “アラビア海での初泳ぎだ！”

水温は、32~34℃ぐらい、ぬるま湯のような海水である。波は、それほど強くない。1 時間ほど、アラビア海の海水浴を楽しんだ。海から上がって気がついたのだが、泳いでいたのは私一人であつたらしい。砂浜にも漁師らしい人のほか観光客は見当たらなかった。リゾート地を楽しむ感性が違うのだということが、粗野な私の心にも伝わってきた。海から上がったままの体でプールへ飛び込んだ。瓢箪型の 80m プール、潜ってみるとかなり深い。自然の水を利用しているらしいのだが温水になっていた。20 分ほどで上がり、ランチタイムとなった。レストランはプールサイドにある。木材とヤシの葉で作られていて、外のオープンスペースには、5 人掛けの丸テーブルが 5 つ、室内には 4 人がけのテーブルが 10 脚、カップル用のテーブルが 20 脚。窓は大きく開放されていて、外の景色が存分に楽しめるようになっている。料理は、バイキング形式になっていて親しみやすく、しかも、とびっきり旨い。外食で、これほどおいしい料理は、インドに来て初めてであった。2 時間ほど休憩することにして、部屋に戻った。

昼寝の習慣のない私は、入口右手にあるマッサージルームに入って、そこに置かれているビニール張りのベッドやどくだみ臭の漂う黒い液体の入った缶、暗い緑色のパウダーなどを見て回っていた。そして、このマッサージルームが私の身にかけてない凄絶な体験を及ぼすことになるとは、この時はまだ想像だにできていなかった。サチンが起きてきた。夕方 6 時から始まるケララに伝わる伝統的舞踊“カタカリ・ダンス”を見に行くことになっているのだが、6 時までには、まだかなり時間があつた。

「山本さん、インド式マッサージってやったことないでしょう。薬草や身体を活性化させる石の粉をオイルと一緒に全身に塗り込むマッサージです。これをやると 1 週間は快適な気分ですよ」

「ほんと？ サチンはやったことあるの？」

「何度もやったことあります。すごい気分爽快になります」

「ふうん。じゃあ、やってみようか」

「ちょっと待ってて、フロントに頼んできます」と言って、サチンは出て行った。しばらく待っていると、まだ幼さが残る顔をした真っ黒い肌の痩せた少年と一緒にサチンが帰ってきた。少年は、部屋に入ってくるとそのままマッサージ室に入り、やおら、衣服を脱ぎ始め、ふんどし一丁になった。体の色と同じような暗緑色に染まったふんどしが少年の経験を物語っているのだろうか。手際良く準備を進めている。中に入ってくるようにと少年が手招きをした。私は、サチンを見た。ニヤニヤしている。いやな予感に襲われて、

「ほんとに大丈夫なんだろうな、サチン！」と、聞いてみたが、

「だいじょうぶよ、気分爽快になるよ。中に入る、いいね」と言いながら、ドアを開けて私を押し込んだ。

服を脱げ、パンツも取れ、と言われて、私は素っ裸になってしまった。Tバックのようなふんどしを着けられてベッドにうつ伏せにさせられた。少年の手が背中を滑って行く。頭のとっぺんから足の裏、尻の穴にまで…、全身隈なく、ほんとに隅々まで薬臭い緑色のオイルを塗った後、手に持った暗緑色のパウダーで体を擦っていくのだ。パウダーと言っても、小砂利交じりの石粉であるから、痛いようでこそばゆい。頭の髪の中も尻の間も異物まみれで気色悪いのだが、別の感覚もあって必死に自制していた。やっとのことで、我が本能を制御出来た、と“ホッ”としていたら、仰向けにさせられた。前もやるのだと言う。脛から耳の穴、………、“なるようにしかならない”とあきらめて身を任したが、一物に触れられた時は、観念してしまった。1時間ほどで終わり、1,500Rs-を払った。日本円にすると3,200円ぐらいである。

薬草の臭いにつつまれながら、タクシーでカタカリ・ダンスを見に出かけた。タクシーは、100km以上のスピードでクラクションを鳴らしながら飛ばして行く。よく事故が起きないものだ。1時間ちょっとで着いた。天井桟敷のような感じでテントが張られている。周りには、沢山の露店が店を開いていた。その向こうに、チャイニーズ・フィッシング・ネットを使って漁をしているのが見えたので、しばらく見物した。採れているのは小魚ばかりである。カタカリ・ダンスは、6時30分に始まった。メーキャップや目の動き、頭の動きなどは歌舞伎に似ているが、歌舞伎よりは動きが少なく、目と表情だけで感情を表現している。観客は、欧米人が大半を占めていた。約1時間半で終幕。感想を求められたので、ノート2枚に日本の能と歌舞伎について日本語で書きおいてきた。

コテージへ帰る途中、昼間のヒンズー教の祭りが、夜になって佳境を迎えていた。見物することにして、靴と靴下を車に残し裸足になって祭りの中に入って行った。シヴァ神をたたえる祭りで、今夜は前夜祭とのこと。正面に、昼間見た5頭の象が黄金の飾りを纏い、かがり火を前にして立っている。象の背には、盾を持った人、丸い大きなうちわのようなものを持った人、純白のハタキボウキのようなものを持った人達が乗っている。時々立ち上がっては、手にしたものを打ち振っている。真ん中の3頭の象には4人、両端の2頭には3人の人達が乗っている。中の3頭は、シヴァとその妻たち、両サイドは、シヴァとそ

の妻たちの護衛官らしい。賑やかな曲が広場に響き渡っている。演奏に用いられている楽器は、Panchvadhya とトランペットと太鼓である。Panchvadhya というのは、サキソホーンを細長くし円形状にしたような楽器である。円形に反り返っていて、奏者の頭の上で音が出ている。長さは、1.5mほどもあるだろうか。Panchvadhya 奏者たちは、9人ずつ2列に並び、その前にトランペットが5人。これに向い合う格好で、太鼓が9人ずつ2列に並び、競うように演奏している。真鍮製の篝火筒が3本、ゆっくりと振られている。一つの篝火筒には9つの油壺がついていて、火が燈されている。3人の男たちが、この篝火筒を象に向かって、うちわのように扇いでいる。

「サチン、3とか5とか9という数は、ヒンディにとってたいせつな数なのか？」と、問いかけてみた。

「たぶん、そうだと思います。よく分からないけど」と、返ってきた。

しばらくの間、異国の祭りを楽しんでからタクシーに戻り、コテージに帰ってきた。

10時に夕食を摂り、サチンとしばらく話をしてから眠った。翌朝、5時に起き、浜辺を散策した。波打ち際で地元の漁師たちが網を引いていた。沖合には、数10艘の漁船が浮かんでいた。

朝食後、バスコ・ダ・ガマの墓石のあるという聖フランシスコ教会へ向かった。その墓石は、荘厳なばかりの静寂に包まれた寺院の一角にあった。墓石の前に佇み、大航海時代の冒険家たちの勇気に、ただただ、恐懼するばかりであった。

午後2時30分、バンガロールへ向け汽車に乗り込んだ。約13時間後、バンガロールへ到着する。